文京学院大学研究紀要 Vol.5, No.1, pp.63～84, 2003

園庭中央部の環境設定のあり方について

―幼児の戸外遊びの充実を目指して―

文京学院大学文京幼稚園*

安達　勉　　奥村　幸子　　益田　薫子　　油谷　理恵
吉原麻奈加　　宮城　紀子　　大勝　愛　　大歳　幸子
渡邉みゆき　　榊原絵梨子　　貝瀬　裕子　　坂本絵梨子

要　旨

文京幼稚園の庭は，全面「土」で覆われており，また，文京区内の幼稚園の中では広々としているほうであるが，その恵まれた環境を子どもたちの保育に充分生かし活用しているか，気掛かりであった。よく観察してみると，周辺の遊具や砂場は毎日頻繁に使用され，どの学年も充分活用しているのであるが，庭の中央部は，5歳児がサッカーなどのボールゲームを楽しむ程度で，4歳児・3歳児はほとんど利用していないことが分かった。そこで，移動可能な遊具を庭の中央部に設置したり，サッカーコートの向きを変えてみたり，テントを庭に張り日陰をつくり遊びのコーナーを設けてみたりして，子どもたちの庭の利用状況を観察してみた。その結果，5歳児はもとより4歳児も3歳児も庭の中央部でよく遊ぶ姿が見られるようになった。しかし，まだまだ年齢を超えて交じり合って遊ぶまでには至っていない。これなどは今後の課題である。

キーワード：環境設定・戸外活動・幼稚園・遊び・園庭

Study of Appropriate Environment-Setting in the Center of the Playground
—Aiming at improving Outdoor Activities for Kindergarteners in the Playground—

＊Bunkyo Gakuin University Bunkyo Kindergarten
Correspondence Address : Faculty of Human Studies, Bunkyo Gakuin University, 196 Kamekubo, Oimachi, Iruma-Gun, Saitama 356-8533, Japan.

Accepted October 7, 2003.　　Published December 20, 2003.

はじめに

本園は，東大キャンパスに隣接した文教地区に位置し，1618m² の敷地に“土の園庭”を所有している。都内の幼稚園としては広い“土の園庭”は，子どもの入園を希望する保護者の重要な選択条件になっている。文京区という場所や土地柄のため，園児の住居はマンション住まいが圧倒的に多く，一軒家でも土の庭がある家庭は稀である。地域には広々とした公園はほとんどなく大人が生活するには交通の便もよく暮らしやすいのであるが，子どもにとってはのびのびと自然の中で遊ぶというような環境にはほど遠い状況である。だからこそ“土の園庭”に魅力を感じ，土の上を思いきり走り回ったり，砂場で泥だらけになって遊べる環境が大切だと考える保護者が多いと思われる。

この広い“土の園庭”では，各学年で時間を制限することなく全園児180名が同時に園庭を使用することができ，大きな利点となっている。このような恵まれた“土の園庭”ではあるが，固定遊具が園庭の周囲に設置され，園庭の中心部分のスペースが広いという特徴があり，日頃から園庭の使い方を検討していきたいという思いがあった。「園児たちはどのようにこの園庭を使って遊びを繰り広げているのであろうか。」毎日の保育の中で把握しきれていない園庭遊びの状況を再度見直し，年少・年中・年長児が自発的に遊びを展開し，“園庭遊び”をさらに充実できるように，園内研究として取り上げることにした。

家庭での子どもたちは，テレビやビデオを見たり，テレビゲームを媒介にして友だちと一緒に遊ぶことが多く，その他にも絵を描いたり，製作をしたり絵本を見る等，室内での遊びが多い様子である。そして近年，幼児の数が減少し，兄弟や地域の子どもたちとふれあう機会が少なくなっている。その点からも室外で体を動かして遊ぶというような経験は“園庭遊び”の中で培われていくものであろうし，また，“園庭遊び”の中で異年齢児間での交流の機会をもつことができると思われる。幼稚園では，家庭において子どもたちが経験できないものを積極的に経験させてあげる必要があるのではないだろうか。

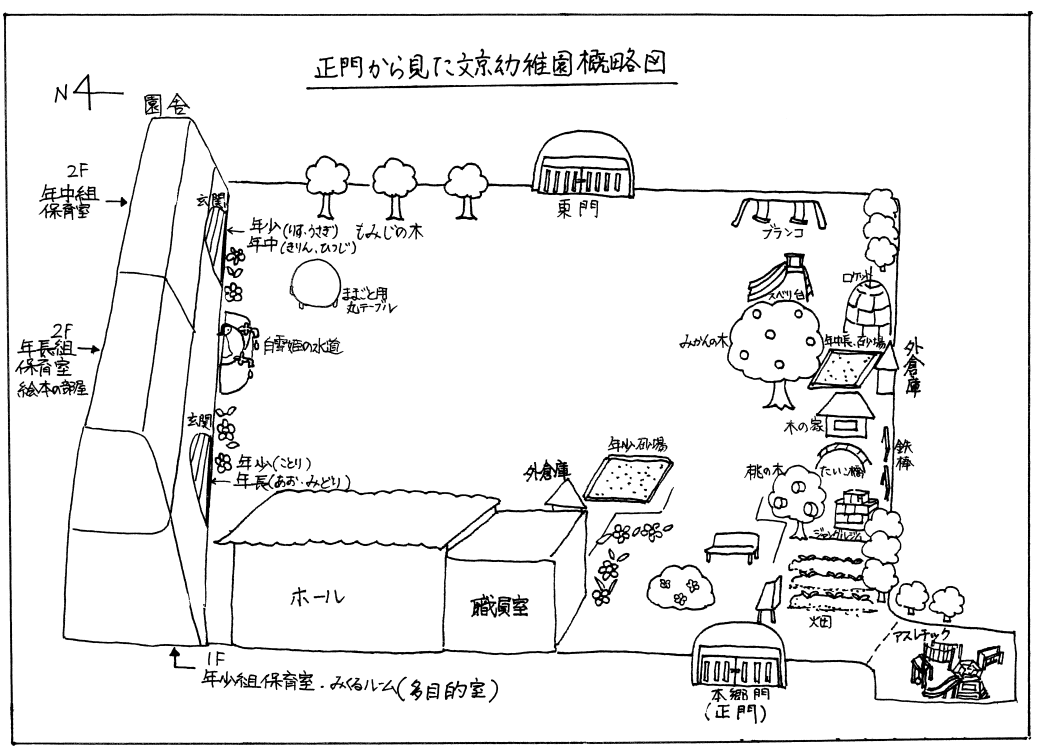
平成16年に創立50周年を迎えるが，10年程前の“園庭遊び”の様子は製作などの一斉活動終了後に行うことが主であった。そして年長児の係活動（ブランコを取り付けたり，砂場の遊具を出すなど）を重視していたため，あえて登園前の園庭には遊具を何も準備しない状態にし，ゲーム用にラインを引くのは保育者が子どもと共に園庭に出て遊び始める時に行っている。5年程前から，新教育要領の改正に伴い本園の保育の見直しが行われるようになり，その流れの中で１年前より“園庭遊び”を保育者全員で意識して考えるようになったのである。

本園では，保育に体操や英語を取り入れたり，いろいろな材料を使って製作したり，園外保育に出掛けるなど，様々な保育活動を行っている。しかし平素最も大切にしていることは，子どもが自分で遊びを見つけ友だちとかかわりながら遊びを思いきり楽しむことができる保育で

ある。幼児期の教育とは，幼児をとりまく外界の影響の中で，子どもたちが生活し，遊び，学ぶことであり，“環境教育”を全職員が学び直し，環境設定の課題に取り組むことは，これからの本園の保育にとって重要であり新たな保育展開を生むこともできると考えられる。

今回の園内研究は平成14年の２学期に園庭遊びの現状を把握することから始め，その現状を基盤にして，平成15年１月から平成15年７月まで，数種類の意図的な園庭の使い方を職員同士で考え合い試み，“園庭遊びの一考察”として事例をまとめたものである。

（奥村　幸子）



1．研究目的および方法

①研究目的

今年度の研究課題について話し合いをもつ中で，第一に考えられたのが，日常の保育を行いながら並行してできる研究であった。特に，ある特定の個人や学年に照準をあわせて進めていくのではなく，園全体をながめ，本園の保育で見直す必要があるものはないかを考えてみることにした。

その中で，まず子どもたちの遊びの様子に注目してみた。好きな遊びの時間では，年少・年中・年長児がそれぞれに自分の遊びを楽しんでいる。時には，学年の枠を超えていろいろな遊びが展開されている。園庭の周囲を囲むようにある固定遊具で遊ぶ姿，砂場では水を使用してダイナミックに遊ぶ姿，畑で虫探しをする姿，“かくれんぼ”や“だるまさんがころんだ”をしている姿，そして園庭中央部では毎年主に年長児が活発に集団遊びをする姿が見られる。その他遊びは日々変化し工夫され様々な形で展開されている。一方，一人ひとりに注目してみると，それぞれに気の合った友だちを誘って思い思いの遊びを楽しんでいる。また保育者を誘って遊ぶ子どもたちも楽しそうな様子である。

ほとんどの遊びでは，年齢に応じて遊び方に成長の違いはあるものの，どの学年の子どもたちも各々参加している姿が見られる。しかし，園庭中央部に関しては，年長児が集団遊びで使用する機会が圧倒的に多い。例えば，年長児がその日の主活動の都合上，園庭に出ていない場合，年少・年中児の遊びは，一斉活動で意図的に園庭中央部を使用する日以外は自発的に園庭中央部で遊ぶ姿がほとんど見られないのが現実であった。

本園の特徴の一つである“広い園庭”。面積はかなり確保されている。サッカーやドッジボールなら充分な広さのコートを作ることが可能である。また，運動会のリレーもこの園庭にトラック状のラインを引いて，当日は年長児たちが真剣に走る姿も見られる。この園庭があるゆえに子どもたちの中では集団遊びが活発に展開されているのは事実である。しかし実際のところ，全園児がこの園庭を充分に活用できているのか。また別の視点から考えたら，もっと違う活用方法があるかもしれない。その疑問の解明こそが本研究の目的である。

②研究方法

平成14年度の２学期から調査研究を開始した。調査期間は，３期・３段階に区切り行われた。

A：平成14年９月～12月

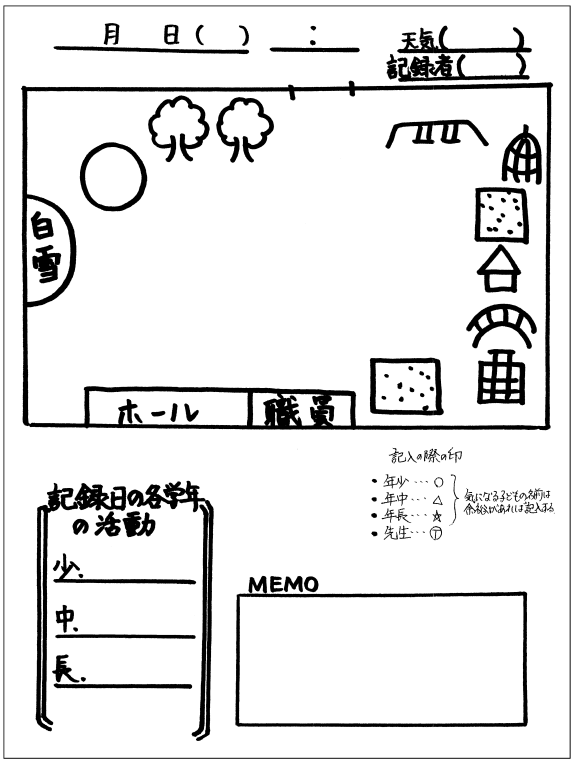
B：平成15年１月～３月

C：平成15年４月～７月

尚，調査の対象は，園庭で遊ぶ全園児177名（年少児70名・年中児60名・年長児47名：平成15

年９月現在）である。

それぞれの期間は段階を追って，少しずつ発展させ，それに合わせて調査内容も変えているが，その際に使用した記録用紙（図１）は，すべて共通に使用している。この記録用紙には，日時，年齢別に園庭遊具や園庭使用頻度が分かる園児数，遊びの内容，その時の具体的な様子，各学年のその時点での活動内容などを記録するようになっている。これを共通のファイルで保管して，毎回，担当の記録者が記入。さらに記録写真も撮るようにした。



（図１）

③研究内容

●A（平成14年９月～12月）

第１段階では，まず，現在の園庭の使用状況を把握することを目的とした。学年ごとに１週間担当してその中で無理のない可能な数日間を選び，保育中に記録するようにした。

この時期は，１学期を終えてクラスや友だち，保育者にも慣れて，子どもたちも安定した生活を送ることができるようになっている。また，この期間は，運動会に向けての活動，その後の運動会ごっこ等が行われた時期である。特に保育者が意図的な環境設定はせず，子どもたちからの要求や前日の遊びの流れから保育者が登園前からラインパウダーなどを使用して，予めラインを引いて遊びの準備をしておくこと等日常の流れで必要と思われる設定は行った。

●B（平成15年１月～３月）

気候も寒くなってきた３学期ではあるが，クラスの友だちとの関係も強いものになり，集団で遊ぶ姿が増えてくる。第２段階では，保育者が試みてみたい園庭中央の環境設定を工夫し，以下の事例研究を進めていった。

事例１：園庭に遊びコーナーを設置する

事例２：ままごと用丸テーブルの移動による遊びの展開

事例３：コート（サッカー・ドッジボール）の位置を考える

事例４：園庭固定遊具をすべて使えなくした場合の子どもの様子

各学年で一つおよび二つのテーマを担当し，１週間継続して研究を行う。尚，担当学年は，

登園前に環境設定を行い，保育中に子どもたちの様子を記録するようにした。

●C（平成15年４月～７月）

新年度を迎え，園庭には，入園したばかりの年少児が保育者の後をおって遊ぶ姿が見られる。年中・年長児も進級し，新しいクラス・友だちに徐々に慣れていった。

第３段階では，第２段階でさらに継続観察していきたいものを具体的に実践してみた。保育者も新しい学年になったため，その学年でB期間同様，１週間ごとに環境設定および記録をして以下の事例研究に取り組んだ。

事例５：園庭に多目的コーナーを設定する

事例６：園庭に製作コーナーを設定する

事例７：子どもの活動に合わせたままごと用丸テーブルの設定

以上，３段階に分けた研究を実践した。各段階の終了時には必ず全体で話し合いの場をもつようにして，次の研究段階の課題を話し合い，全職員で取り組んでいくことを心がけ，研究を進めていった。

（油谷　理恵）

2．現状の把握（期間A：平成14年９月～12月）

記録１．10月16日（水）　10：35～　天気：晴れ

各学年の活動内容は，年少児，自由遊び。年中，年長児は絵画活動（運動会の経験画）をしていた。活動の多い時期であるが，空いた時間を利用して記録にあたる。

（**写真１**）

（**写真２**）

年少砂場…年少児12人　年中・長砂場…年少児２人　年中児４人　年長児２人　ブランコ…年中児２人　年長児１人　木の家…年少児５人　リレー…年少児15人　年中児７人　年長児５人　たいこ橋…年少児１人　年中児４人　ロケット…年中児２人　ジャングルジム…年少児３人　年中

児２人　サッカー…年長児９人　ままごと用丸テーブル…年少児４人　年中児３人　玉入れ…年中児２人

総数…年少児42人（71人中）　年中児26人（48人中）　年長児18人（61人中）

運動会直後ということもあり，運動会ごっこが展開されることが予想される。玉入れや，リレーを各学年が，共に楽しむ姿が見られるのもこの時期ならではである。

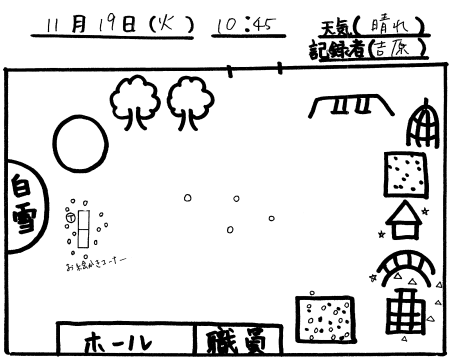
一つの遊びを異年齢で，しかも全学年が参加して遊ぶ姿は，１年を通してもそう多くは見られない。運動会後の自由遊びの中で，先日目にした年長児の競技に参加し，喜ぶ姿がほほえましい。また，年長児からルールを教わったり，励まされたりと，様々なかかわりから来年度の運動会へ向けて，期待も高まる。

記録２．11月19日（火）　10：45～　天気：晴れ

各学年の活動内容は，全学年が好きな遊びを行っていた。

気温も下がり，子どもによっては，徐々に園庭で遊ぶことを好まなくなってくる時期である。よって，園庭に出る子どもたちの姿が前回の10月に比べ少ないことが予想される。

（**写真 3**）



（**図 1**）

年少砂場…年少児13人　たいこ橋…年中児２人　年長児１人　ジャングルジム…年中児２人　お絵かきコーナー…年少児12人　木の家…年長児２人　鉄棒周辺…年中児２人　園庭中央…年少児４人　年中・長砂場…年少児２人　年中児５人　年長児７人　ブランコ…年少児３人　年中児３人　年長児４人

総数…年少児34人（71人中）　年中児14人（48人中）　年長児12人（61人中）

どの学年も自由遊びの時間帯であるが，全体的に園庭に出て遊ぶ姿がやはり少ない。

園庭中央は年長児が広々と使って遊んでいる。記録をとる前には，年中児も園庭中央でサッカーを行っていたが，年長児が交じって遊び始めると，自然と年中児は姿を消してしまった。二つの学年に体力面，技術面ともに差が大きく生じていることは一目瞭然であり，その事を気にせず遊ぶ子どももいるが，多くは「お兄さん達は上手だからな…」「なかなかゴールできな

いんだもん」や，「年中さんはへたくそなんだもん…」「全然ゴール決まんないんだもんな…」などと，子どもたちながらに一緒に遊べない理由を述べていた。

記録 3．12月 3 日（金） 9：30～　天気：晴れ

各学年の活動内容は年少・年中組が，自由遊び。但し年少組の一部のクラスは集まりの活動中であった。年長組は体操の活動を行っていた。

寒さも本格的になり，園庭で遊ぶ時間も徐々に短くなってきている。

この時期ならではの，落ち葉拾いに出掛ける学年も多く，園庭には集めてきた落ち葉の山が登園時より設定されている。この落ち葉を使って，ダイナミックに掛け合ったり，製作活動ができるよう，予め紙やセロハンテープなども用意しておく。

（**写真 4**）

（**写真 5**）

年中･長砂場…年中児 4 人　ブランコ…年中児 5 人　たいこ橋…年中児 7 人　園庭中央…年中児 9 人
鉄棒周辺…年中児 3 人　ころがしドッジボール…年少児 7 人
落ち葉の山…年少児 3 人　年中児 4 人
総数…年少児10人（71人中）　年中児29人（48人中）　年長児 0 人（61人中）

本園の登園時間は 9：10～9：20である。登園直後のこの時間帯は身支度をしている子どもも多く，園庭に出てきている子どもが少ない。

特に年少児は身支度が終わる時間に差があり，自由遊びに入ったクラスとまだ集まりをしているクラスとがあり，ほとんどが園庭には出てきていない。

年長児は週に一度，体操の時間がある。この日は丁度その日にあたり，体操の時間間近のため，園庭に出る姿がなかった。

また，登園した際に目に入ってくる落ち葉の山に子どもたちは興味を示し，自由遊びに入るとすぐに，遊び始めた。他学年と交じり合い，思い思いに落ち葉を掛け合ったり，布団に見立てて寝転がったりと，自由に遊ぶ姿が印象的である。

保育者の意図的な環境は，やはり子どもたちの遊びに大きく影響を与え，時と場合によってはなくてはならない，大切な援助であるといえるのではないだろうか。

1．データから見る２学期の遊びの傾向

・時間帯によって，外遊びをしている子どもの数が違う。

・保育者による遊びの提案（かげふみ，鬼ごっこなど）や，ゲーム用のライン（サッカー，リレー，どんジャンケンなど）が引かれていないと，園庭中央での遊びはなかなか始まらなかった。

・季節ならではの遊び（落ち葉の山，運動会後の活動）については，他学年との交流が見られた。

2．記録をとり，明確になったこと

固定遊具のない園庭中央での遊びはどうしても保育者主導になってしまう。

では，固定遊具を使わない遊びは，というと，ルールのある集団遊びが中心となる。

ある程度のルールを理解し，そのルールに従って遊びを楽しめるのは主に年長児で，年少，年中児は，今のところ保育者の援助なしではすぐに遊びが中断してしまい，継続することが難しい。また，他学年との交わりが少ないことも記録をとることで分かった。

3．３学期にはどのようなことに取り組んでいくか

他学年とのかかわりが，今まで以上に取れるような，環境の工夫をしてみようということになった。具体例を次に挙げる。

・つなひき，玉入れなど，どの学年も容易に取り組める遊びを，保育者が設定する。

・運動的な遊びだけでなく，製作コーナーや，休憩コーナーを設け，他学年との交流を図る。

このように環境の設定を工夫するだけではなく，保育者も積極的に子どもたちの遊びに参加しルールのある集団遊びがどこまで定着し，子どもたちのものとなるのかを見守っていくこととした。

（吉原　麻奈加）

3．意図的な環境設定と子どもの様子Ⅰ（期間B：平成15年１月～３月）

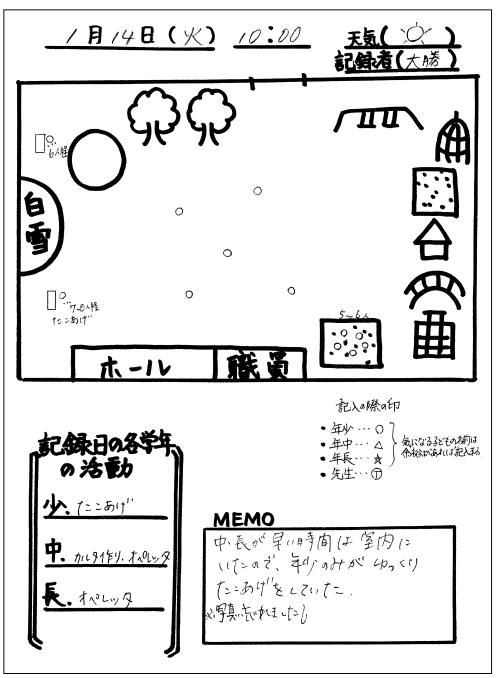
事例１　園庭に遊びコーナーを設置する

①仮説

年少児が園庭で遊ぶ時は，主に固定遊具や砂場を使用し，数名でルールのある遊びを行う時は，園庭の隅で場所を見つけていた。年少児は，サッカーなどで園庭中央を頻繁に使用する年中児や年長児に比べ，園庭中央を使用する頻度は少ない。普段，年少児は，遊具を使用して遊びを発展させることが多いので，何の遊具も設定されていない園庭中央で遊び始めることは困難である。また，年中児や年長児が走っていたりボールが飛んできたりと，年少児が安心して遊ぶことも困難であった。そこで，年少児が園庭中央を使用するには，年少児が中心となり，参加できる遊びコーナーを設定することが必要ではないかと考えた。

②実際

遊びコーナーは，誰でもいつでも参加できるような種類を考え，たこあげ，ぱかぽこ（缶ぽっくりのように足にはめて遊ぶもの），そして竹馬を設置してみることにした。１日１種を，昼食後に各々が好きな遊びをする時間に設定した。図１は，たこあげのコーナーを設定した時の記録である。写真１は，子どもたちが園庭中央で竹馬に乗って遊ぶ様子である。年中児や年長児も一緒に遊ぶ様子が見られる。



（**図 1**）

（**写真 1**：平成15年１月24日撮影）

③結果

園庭中央といっても，他学年の遊びの妨げにならないように工夫してコーナーを設置したので，年少児のための場所が確保された。そのことにより，年少児が園庭中央で遊ぶ時間も増えた。また，遊びが見つけられない子どもや，寒い気候から保育室にこもりがちな子どもにとっても，魅力的な遊びコーナーは充実した遊びの場所となった。

図１から読み取れるように，たこあげは，コーナー周辺のみならず，園庭全体を使い走り回る姿が見られた。たこあげや，ぱかぽこは年少児のみであったが，竹馬は年中児や年長児もいっしょに参加する姿が見られた。また，竹馬の場合初めのうちは（設定した１回目は），ためらいがちに参加してきた年中児や年長児も，回数を重ねると，自然にコーナーの中へ参加することができた。

④考察

・コーナーを設置することにより年少児が園庭中央で遊ぶという，今回の意図・目的は達成できた。
・子ども同士がぶつかってしまう等の理由から，他学年が園庭中央を使用している時は，自然に園庭の端の方へ遊びが移動する姿が見られることから，全学年に定期的にコーナーを設置することで，園庭中央をどの学年も使用することができると思われる。
・竹馬のような他学年も参加できるような遊びを設置することで，他学年児同士の交流の場が生まれると共に，すべての学年の子どもが園庭中央を利用することができるという利点があることも結果から読み取ることができる。
・以上のことから，各学年に定期的に設置するコーナーと，どの学年も参加することができるようなコーナーを設けることで園庭中央は，さらに有効に利用できると考えられる。

（貝瀬　裕子）

事例 2　ままごと用丸テーブルの移動による遊びの展開

①仮説

子どもたちはままごと遊びが大好きである。本園には各保育室に１箇所ずつ，および園庭に２箇所のままごとコーナーが設けてある。子どもたちはそこで，お母さんやハムスター，お店屋さんなど思い思いの役になりきって遊びを展開する。保育室と園庭でのままごと遊びは，環境の違いによりそれぞれ扱える遊び道具に差が出てくるが，その中でも外ままごとの魅力は何かと考えると，砂や葉っぱなど子どもたちのイメージを豊かに表現できる素材があるということではないだろうか。

また本園では平成12年度より，子どもたちが遊びをよりリアルに体感できるようにというねらいをもち，外ままごとの遊び道具に本物の鍋やフライパンを置くことにした。このことにより，子どもたちの遊びは充実しつつある。しかし，外ままごとコーナーは依然として人気がなく，コーナーを利用する子どもたちの顔ぶれはいつも同じである。特に年少組のテラス前に設置してある丸テーブルは，年中児，年長児となるとコーナー利用回数が急に減るように感じられる。年中児，年長児があまり利用しない理由に環境設定上の問題があるのではないかと考え，事例２では，丸テーブルを園庭の中央付近に移動し，子どもたちの視界に入りやすくなるように設定してみた。年中児，年長児の利用が増えることで，自然に縦のつながりができたり，今までままごとには関心のなかった子どもたちにも刺激になり，より子どもたちの遊びの幅が広がるのではないかと考える。

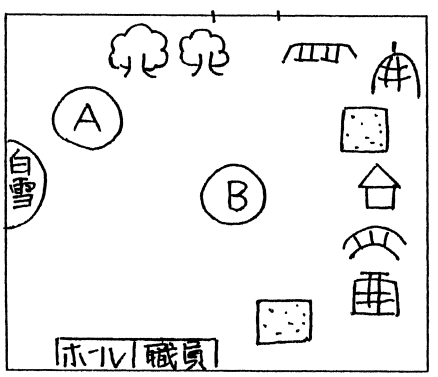
②実際

登園前の環境設定の時間に，丸テーブルを図１のAからBの位置へ移動する。その際，子ど

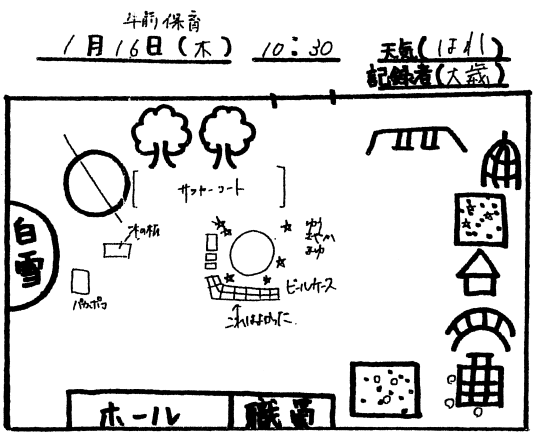
もたちがすぐに遊び込めるように，遊び道具もテーブル近くに移動する。ベビーバスに水や砂を溜めておくなど，その他の設定は普段どおりである。1週間ほど実践してみる。

記録1．1月16日（木） 10：30～ 天気：晴れ

朝から天気がよく，子どもたちは園庭中央に設定してあるままごとコーナーに目を向けながら登園して来る。各学年オペレッタの活動があり，一番初めに園庭に出てきたのは10：10の年長児である。その後，オペレッタの活動を終えた年中児，年少児が年長児と入れ替わるように，10：35ごろから園庭で遊び始める。園庭にはサッカーコート，ままごとコーナー，ぱかぽこコーナーを設定してある。



（図 1）



（図 2）

③結果

（写真 1：平成15年1月16日撮影）

年長児が外に出てくると，真っ先に丸テーブルを見つけ遊び込む姿が見られる。保育者の介入などないが，長時間遊び続けた。逆に年少児が丸テーブルに入りにくくなっているように思えたため，翌日は保育者が年少児の手を取り，丸テーブルで遊んでみた。すると，前日に遊んでいた年長児も「いれて」「いいよ」と自然な形で言葉を掛け合い，場所を共有して遊ぶ姿が見られた。人数が増え丸テーブルだけでは収まらなくなってきたため，ビールケースを並べて設置してみた。その結果さらにコーナー空間としてのままごとが充実し，多くの子どもたちが利用するようになった。1月はオペレッタの練習があるため，園庭の利用時間に学年ごとのばらつきがあった。そのため，学年相互に交わりをもって遊ぶ姿はあまり見られ

なかったが，この１週間の中で，普段は利用することの少なかった年長児が遊ぶ姿が特に多く見られた。

④考察

・今までは年長組玄関から外に出た時にままごとコーナーは視界に入りにくかったが，子どもたちの視界に入りやすい場所にコーナーを設定することで，子どもたちの遊びへの参加意欲に変化がでることが分かった。
・年中児，年長児になると長時間保育者の介入がなくても遊びが継続していく。
・年中児，年長児が遊んでいるところへ，年少児は一人で遊びに入り込む勇気はないようである。遊びが定着するまでのしばらくの間は，保育者がリードしながら援助していく必要がある。しかし回数を重ねていくことで，縦の交わりが生まれることも期待できる。
・園庭でのままごとの位置を中央付近にもっていくことで，砂場や固定遊具との位置が近くなり，一度遊びをやめた子どもたちが再度遊び始める時に入り込みやすく，また他の友だちを遊びに誘いやすいことが分かった。子どもたちの遊びに変化をつけるという意味で，ままごとコーナーを園庭中央に移動する取り組みはよいきっかけになった。しかし，中央に設定するとサッカーやドッジボールなどの運動遊びの妨げになる場合もあることを考慮しなければならない。
・園庭でのコーナー遊びにおいても保育室でのコーナー遊び同様，子どもたちの遊びの変化に応じてコーナーを拡大したり，遊びが盛り上がったりするよう配置を考慮しながら臨機応変に保育者が援助していくことが大切である。
・ままごとコーナーの環境設定をする際，ビールケースやござなど空間としてのしきりを設けることで，子どもたちの遊びがよりいきいきとしてくる。

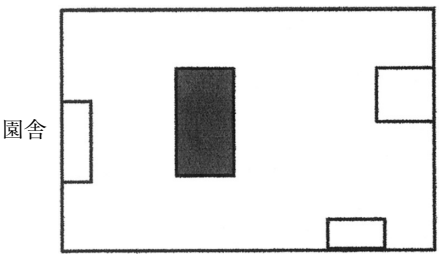
（渡邉　みゆき）

事例３　コート（サッカー・ドッジボール）の位置を考える

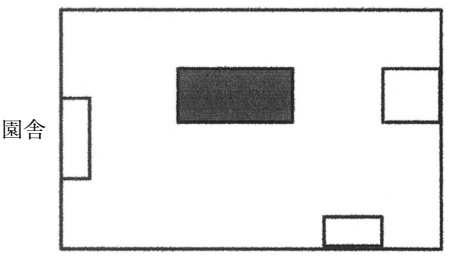
①仮説

子どもたちの間（特に年長児）でサッカーやドッジボールが流行し，毎日園庭にコートを描いて，夢中になって楽しむ様子が見られる。サッカーに関していえば，保育終了後クラブに通う子どもも多く，球のスピードや技術も本格的である。年長児がサッカー，ドッジボールをしている傍らでは，他学年の子どもがままごと遊びをしたり鬼ごっこをしている。元来，コートは園舎に対して平行に描かれることが多かった(図１)。そのため，砂場や固定遊具に向かう子どもたちの流れと交差してしまい，結果，コート内を横切る子どもがいたり，行き交うボールや人同士，衝突する場面も見られる。

コートの向きを変える（図２）ことで，子どもの流れが一方向となり，コート内の横切りや衝突が避けられるのではないかと考えた。

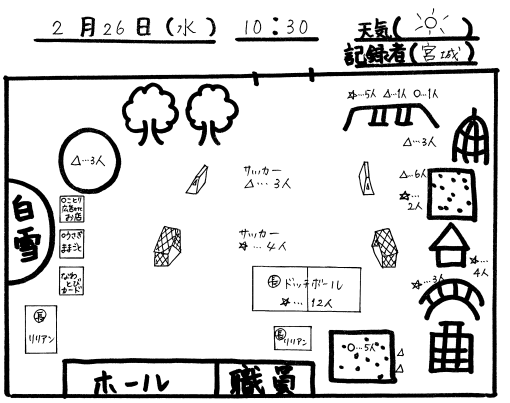


（図 1）

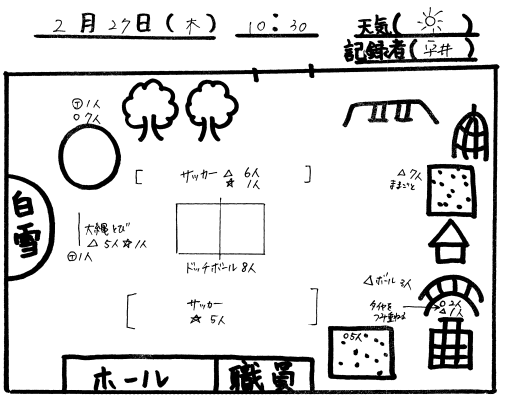


（図 2）

②実際：2 月26日（図 3）・27日（図 4）の園庭使用の記録



（図 3）



（図 4）

両日共，サッカー用を 2 コート（ゴールのみ置き，ラインは引かないもの），ドッジボール用を 1 コート用意した。コートの向きや場所の変化を気にする子どもはいなかった。サッカー用コートはラインを引かず，サッカーに参加する子どもが増えた時や，年長児のみ園庭に出ている時にはゴールをずらしてコートを広く取り，よりダイナミックなゲームを楽しむこともできるようにした。年少砂場前に，26日はラインのあるドッジボールコートを，27日はラインのないサッカーコートを設置して相違点を観察した。

③結果

コートの向きが変わっても，サッカー・ドッジボールなどの遊びには影響はない様子である。図 3 によると，サッカーコートが 2 面（年中・年長用），ドッジボールコートが 1 面，園庭中央に描かれている。そして，園庭の端にはいくつかのコーナーが設置され，固定遊具で遊ぶ子どもも多数見られる。この日は天気もよく，園庭で遊ぶ子どもが多かった。よって，園庭を行き交う子どもの数も多かったが，終始衝突もなく，流れがスムーズであることが分かった。特に

26日は，ラインのあるドッジボールコートを年少砂場前に設置したことで，コートがより明確に認識され，コート内に立ち入る子どもが少なかった。

コート描きに使用するラインパウダーは，以前は園庭外にある園芸倉庫に入れて保管していた。しかし，サッカー・ドッジボールの流行やその他の運動遊びの活発化に伴って不便を感じるようになり，使い勝手を考えて玄関横にラインカーとパウダーを置くことにした。ラインパウダー置き場の移動によって，保育者が子どものリクエストに素早く対応できるようになり，また遊びの様子に合わせてラインを引くことで，より遊びを盛り上げることもできるようになったと思われる。

④考察

・子どもの流れが一方向となったことで，他学年の子どももコート内を横切ることなく，自分の目的の場所へ向かうことができるようになった。
・コートの横切りがなくなった結果，園児同士の衝突・ボールとの衝突も減らすことができ，安全性が高くなった。
・園庭に複数のコートを設置する時，全園児が園庭を使用する時間帯には，コートを明確にするためにラインパウダーでコートを描くことが安全性の向上に有効である。
・③の結果でも述べた通り，コートの向きが変わっても遊びには影響が見られなかったことを併せて考えると，今後サッカー・ドッジボールなど，流れの方向がある遊びを行う際には，全園児の流れを踏まえた上で環境設定を行うことが必要である。その結果，より安全性を高め，子どもたちも遊びに集中することができると考えられる。

（宮城　紀子）

事例 4　園庭固定遊具をすべて使えなくした場合の子どもの様子

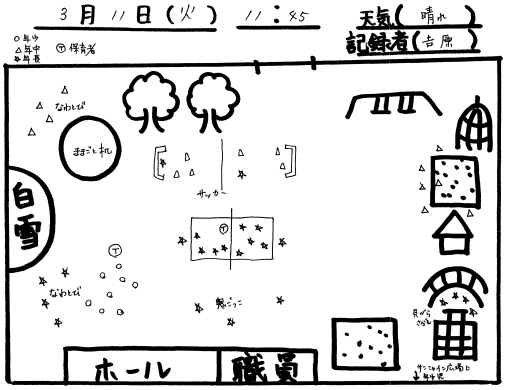
①仮説

普段の子どもの遊びの様子を観察すると，園庭の周辺に設置された固定遊具（砂場，鉄棒，ブランコなど）や，ままごとを好んで遊んでいる子どもが多いことが分かった。そこでそれらの遊具が使用禁止になれば，子どもたちは園庭を使用した新たな遊びを工夫するのではないだろうかという仮説をたてた。

②実際

平成15年 3 月10日，11日の 2 日は遊具をロープで巻いたり，カバーをかけるなどして固定遊具，ままごとの使用ができないようにした（写真 1）。園庭にはサッカー・ドッジボールのコートや，引越し鬼のラインを準備した。ボール，縄跳びは普段どおり使用できるようにした。

（**写真 1**：平成15年 3 月10日撮影）



（**図 1**）

③結果

当日は子どもたちに以下のような様子が見られた。

年少児：・砂場遊びができないことに戸惑いを感じ，保育者の周囲に集まってくる。
・普段どおり園庭の隅で虫探しをする。
・室内で劇ごっこを楽しむ子どもが増える。

年中児：・普段どおりサッカーを楽しむ。
・普段よりも縄跳び遊びを行う子どもが増える。
・自発的に仲間や保育者を誘って地蔵鬼を始める。
・ビールケースを電車に見立てて，園庭全体に電車を走らせる遊びを始める。
・砂場の遊具が使えないにもかかわらず，砂を使って遊ぼうとする。

年長児：・普段どおりドッジボール，サッカーを楽しむ。
・普段よりも縄跳び遊びを行う子どもが増える。
・自発的に仲間を誘って鬼ごっこを始める。
・園庭の砂の中で貝殻探しをする。

年少児では，保育者が意識的に子どもを盛り上げる遊びを率先して提供するなど，特別な配慮が必要となった。また，年長児は普段から園庭固定遊具を使用しない子どもが多いために，遊びの様子に大きな変化は見られなかった。年中児は，年少，年長児に見られた両方の様子が見られた。

④考察

・年中児の一部と年長児では自発的に仲間を誘って集団遊びが始まったり，普段から遊んでいるゲームがより盛り上がる様子が見られた。このことから固定遊具の使用禁止によって，新たな交友関係が生まれるきっかけが作られることも考えられる。
・縄跳び，ドッジボールなどの遊びを意図的に盛り上げたい時には，固定遊具使用禁止が有

効な方法の一つであると考えられる。

・自発的な遊びを見つけるのが難しい年少児や一部の年中児には，保育者が意図的に集団遊びを準備するなどの環境設定がないと園庭での遊びが発展しないことが分かった。

・今回の試みで，年齢によって園庭での遊び方が大きく変わってくることが改めて確認された。年中の２学期後半ごろまでは，自分から遊びを見つけるのは難しく，固定遊具で安心して遊べる環境が重要であると考えられる。

（大歳　幸子）

4．意図的な環境設定と子どもの様子Ⅱ（期間Ｃ：平成15年４月～7 月）

事例５　園庭に多目的コーナーを設定する―事例１の結果を受けて―

①仮説

事例１ではゲームやぱかぽこなどの遊びコーナーを意図的に設定し，結果を得た。そこで，今度は子どもたちが落ち着いて過ごすことができる環境の設定を工夫することにした。

今回の研究のテーマともなった広々とした園庭は本園の特徴であるが，その反面，子どもたちが落ち着いて過ごせる「日陰」が少ないともいえる。日中自然にできる日陰を探してみても，壁側や木の下，滑り台などの遊具の下くらいのものである。

４月から７月は，日に日に気温も上がり，日差しも強くなる時期であり，その中で外遊びを楽しむ子どもたちの体力消耗は大きなものである。また，入園したばかりで園生活に慣れていない年少児にとっては，午前に引き続き，さらに日差しが強くなった午後の園庭での活動は体力だけでなく精神的疲労も大きくなると考えられる。そこで，この園庭に「日陰」となる空間を作ることは子どもたちの疲労を軽減し，外遊びをさらに充実させることにつながるのではないかと考えた。

子どもたちの休憩コーナーとして，2.4m×2.4mの大きさの可動式テント（日陰のない園庭を考慮して，平成12年度に保護者より卒園記念品として寄贈された）を環境の一部として設けてみることにした。また，昼食後はテントの中では保育者による絵本の読み聞かせコーナーやお面作りなど，落ち着いて過ごせる環境の提供を試みた。

（**写真１**：平成15年６月８日撮影）

②実際

写真１は，昼食後の好きな遊びの時間にテントの中で年少組の保育者が中心となり，紙芝居

の読み聞かせを行った時のものである。参加は任意なので，このコーナーには参加せず，園庭の遊具などで遊ぶ子どもの姿も見られた。

③結果

午前の活動ではテントの下でままごとを繰り広げる子どもたちの姿を多く見ることができた。また，午後の活動では，積極的にテントの中での活動に参加する子どもたち（特に年少児）の姿が見られた。さらに「暑いから外に行きたくない」と外遊びを拒否していた子どもも，テントでの活動を通して外に出ることができた。そして，特に年少組は午後のテントでの活動を設けることで，テントのない時に比べ降園前の活動がスムーズになった。

④考察

・ままごとのように，長時間その場で集中して遊ぶには日の当たる場所よりも日が当たらない場所の方が落ち着いて活動ができ，適しているのではないかと考えられる。
・午後のテントでの活動に特に年少児が集う要因は，テントのコーナーを担当している保育者が年少組担当であることも考えられる。が，その後の活動がスムーズになったことを考えると，体力消耗の少ない日陰の空間と遊びの提供は，特にこの時期の年少児が求めているものであり，また心身の疲労を軽減することにつながるのではないだろうか。
・この広い園庭をより豊かに活用するためには，このような「日陰の空間」を設けることが大切であるが，180名近い園児のいる本園では，今回提供したテントでは満足できる環境ではないと考えられる。この２倍以上もしくは１箇所だけではなく複数の「日陰の空間」の提供が必要なのではないだろうか。
・これまでは各学年の活動に合わせ必要に応じてテントを出し入れしていたが，常設することにより，可動式テントは園庭の環境の一部として十分活用できると思われる。

（坂本　絵梨子）

事例６　園庭に製作コーナーを設定する（事例１の結果を受けて）

①仮説

例年，園庭に出ずに保育室で遊んでいる子どもや，園庭で遊びを見つけられない子ども，また一つの遊びが終わってしまい次の遊びを探している子どもの姿を目にする。そのような子どもたちが誰でも遊べるもの，参加できる場所を作り子どもの遊びの幅を広げられないかと考え，園庭にテントを出し，誰でも参加できる“製作コーナー”を設定してみることにした。

②実際

年少児から年長児の誰でも参加できるということで，内容も絵の具を使った染紙やパッチンガエル，たこ作りなど絵を描いたり，少し手を加えればできあがりといったような簡単なもの

を用意した。これらの教材は以前に使用した教材の残りを使用したり，すぐに準備できるものを選んだ。また，テントの位置も保育室の目の前に設定し，保育室にいる子どもにも玄関から出てきた子どもにもすぐに目に付くようにした。

（**写真 1**：平成15年 5 月23日撮影）

③結果

週によって担当の保育者を学年で分けたため，初めは参加する子どもの学年に偏りがあった。しかし，徐々にどの学年の子も参加している様子が見られるようになった。保育室のテラスから覗き園庭に出てくる子どもや，何気なく立ち寄った子どもも興味を示し熱中していた。そして，その場で遊べるものに関してはその作品を使って園庭で遊ぶ様子が多く見られた。また，染紙は保育者が説明を加えたり手をかさなくてはならないこともあったが，教材によっては年少児に対して教材を手渡したり，作り方を教える年中・年長児の姿もあった。

④考察

・どの学年も参加できるコーナーを設けることによって，教材内容を考えれば年長児や年中児が年少児に作り方を教えるといった，学年の枠を超えたふれあいにもつながる。
・保育室で遊んでいる子どもの目を園庭に向けるきっかけになったと考えられ，園庭で遊びを見つけられない子どもにとっては居場所となり，遊びを楽しむことができる。
・特に年少児にとっては，コーナー遊びをすることによって一つの遊びをしたという満足感が得られ，次の好きな遊びに移行することができる。
・テントがあることによって，誰でも遊べるコーナーというものが明確になり，子どもたちにもわかりやすい。
・用意した教材も以前に使用した残りや，準備に時間を費やさずにできるものを考えたため，保育者の準備に対する負担も少なかったといえる。
・さらに続けて行うことで，すべての子どもたちにもそういったコーナーがあることの意識付けができて，もっと多くの子どもが利用すると考えられる。

（大勝　愛）

5．研究の結果

園庭遊びは，雨天時以外は行わないことがない程に園生活の中で日常的なものであるが，今

回この研究に職員全員が取り組んだことにより，改めて多くの発見が得られた。

子どもたちは，園庭に意図的な環境設定や遊びのコーナー準備がされていない場合には，すぐに取りかかりやすい固定遊具や砂場で遊ぶことが多い。その条件では園庭中央では遊びはほとんど展開されていなかった。自分たちでルールを理解し合って行っている，年長組男児を中心としたサッカーのみである。さらに，固定遊具や砂場，サッカーといった遊びの中では，異年齢間の交流はほとんど見られていないのが現状であった。研究の中では様々な試みを行ったが，結果としては，保育者が園庭を意図的にセッティングすることにより，子どもたちの遊びの展開は全く違う模様となることが分かった。

具体的な成果としては，以下のような事項が挙げられる。

・園庭中央に“たこあげ・ぱかぽこ・竹馬”のように，取りかかりやすい遊具を，コーナーとして置くことで，年少児やすぐに遊びを見つけられない子どもの活性化につながる。
・園庭でのままごとの位置を中央付近にもっていくことで（ままごと用丸テーブル移動），砂場や固定遊具との位置が近くなり，一旦遊びを離れた子どもが，再度遊び始める時に入り込みやすく，また友だちを遊びに誘いやすいとの利点がある。
・ままごと用丸テーブルを子どもの活動に合わせて移動することで，それまで使ったことのない子どもも遊びに参加したり，ままごと遊びの展開にも変化が見られる。
・園舎に対して，サッカーやドッジボールコートの向きを変えることで，安全性が高くなった。
―― 子どもの流れが一方向になったことで，子ども同士の衝突・ボールとの衝突を減らすことができる。
・固定遊具をすべて使えなくした日をあえて設けたことで，子どもの遊び方には変化が現れ，新たなる交友関係が生まれるきっかけが作られる。
・園庭にテントを設置し，ままごとコーナーや午後の休憩コーナーとして利用することで，日陰の空間ができ，子どもたちの疲労を軽減し外遊びの充実にもつながる。
・園庭にテントを設置し，どの学年の子どもも参加できる「製作コーナー」を設けることで，自然に交流が生まれ学年の枠を超えたふれあいにつながる。また，年少児や園庭で遊びが見つけられない子どもにとっては，居場所となり，遊びを楽しむことができる。

以上のように，園庭内に意図的にセッティングし遊びを展開することは，確実に子どもたちに充実感や満足感を与えるものと確信する。特に大きな違いとして，セッティングをしない園庭では，子どもの遊びはそれぞれの子どもの得意なものや，入っていきやすい遊びに偏りがちになるということがいえるだろう。それは，遊びの持続性にもつながっていくのではないだろうか。

現に園で一番幼い年少児を見ていると，それは顕著である。生活経験が乏しく遊びを知らない年少児はセッティングをしない園庭では遊びが見つけられず，長い時間過ごすことはできないのである。

今後も園庭遊びをより充実させていくための努力は必要不可欠であろう。ただし，その中で課題としていかなければならないこともある。本園の180名近い園児が園庭で満足して遊ぶためには，既存の備品で充分であろうか。例えば「休憩コーナー」や「無学年の製作コーナー」を設けた際にも，現在の大きさのテント一張りでは窮屈であることが明確である。また頻繁に行われている外ままごとに使う耐久性に優れたテーブルや椅子も数を補充する必要が出てくると思われる。

備品の問題だけでなく園庭内のコーナー遊びにおいては，担当する保育者の配置やローテーションのしかたを再度見直すことで，より良いものになっていくのではないだろうか。

最後に今回の研究を終えるにあたって，全職員で感想および反省会を行った。そこで出された意見をまとめて述べることとする。

○園庭使用に関して

・今回の試みを行うことで，各学年同士連絡を取り合い使用がスムーズになった。
・朝のコーナーセッティングも自然に手早く行われるようになった。
・コーナーが充実し，子どもたちの中に縦のつながりが見られるようになった。
・年少児や遊びを見つけられない子にとっても，充実して遊べるきっかけとなっている。

○全体的な取り組みに関して

・普段はできないことでも，「研究」をきっかけにして新しいことへのチャレンジができた。全職員での取り組みにより，各人の考えを改めて知ることができた。
・多少負担でも，文章を書くことで明確になったことも多い。
・本研究が，保育に密着してできたことで「やって良かった」との感をもてた。

以上のような意見が，保育者一人ひとりから前向きに述べられたことは，本研究の当初の目的を果たしたことであり，日常保育から突出せずにできた研究だったといえよう。今後も，さらに多くの取り組みをしていきたい。保育者が構えずに楽しく行うことが保育を充実させ，子どもたちにより多くの満足感をもたらすことになるからである。

（益田　薫子）

おわりに

「近くに公園があります。季節の花や虫，登れる木，管理が行き届いた安全な遊具。広い原っぱ。みんなが遊びに来ますから，お友達はもちろん，年上の子ともかかわりがもてます。また，めんどうみのいい年輩の方も散歩かたがた来ていますから，子どもたちが世話になるだけでなく，保護者が子育てのアドバイスを聞くことができます。こんな環境ですが，やはり幼稚園に通わせたほうがいいでしょうか？　こんな質問に貴方はどう答えますか。」

〔中略〕筆者は，このあと昨今の環境による教育にふれ，こう結論づけます。

「もちろん，子どもさんはぜひ幼稚園に通わせたほうがいいでしょう。園には，公園にはない保育の専門家である保育者と，その保育者がかもしだす雰囲気がありますから。園には，環境のなかでもっとも重要な保育者がいます。」

上記の引用文は本学園の平山許江教授が「ほんねがイチバン」と題して書かれた著書の抜粋です。

そもそも本研究は，毎年本園の保育を直接ご覧になり，温かいご助言とご指導を下さっておられる平山先生の率直な問いかけに本園の保育者が応えようと出発したものでした。

無い物ねだりをすることもなく，この環境では実現不可能だとあきらめてしまうのではなく，物の配置を変えてみたり，スペースの取り方に変化を加え，平山先生のおっしゃる最も重要な環境である保育者のアイディアで，仮説をたて実証しデータを取り成果を積み重ねてまいりました。本研究を終えて私の思う事を幾つか述べてみます。

研究を始めてみると，研究者の中には，机上の空論を展開し傍観者であったり，客観者であったり，評論家になってしまう者がでてくるものであります。しかし，本研究にかかわった保育者は皆主体的であり，皆が実践者でありました。自らが環境の主体であることを自覚し，輝く子どもの瞳をもとめ，自らを変えようと努力を続けてくれました。平常の保育の中に，上手に研究の内容を取り込み地道にデータをとり，反省し，新しいプランを提案していくという地味な作業ではありますが，研究に欠かせない計画・実行・考察（反省）をしっかりと押さえた良い研究となったと思うのです。

なにより，研究をまとめるにあたり「私は，この研究を通してまちがいなく変わった。今まで漠然と見ていた園庭が私にとってかけがえのない大切な保育の場であることを。」と皆が，感想を一人称で語ったことであります。「環境教育とは……」「保育者の役割は……」等と一般論で感想を述べるのではなく，「私は……」「私にとって……」と主語を自らに置く事ができる主体性こそがこの研究の最大の成果といえると思うのです。

平山先生がいつもおっしゃっておられる「今まで通り，慣例，従来のままはダメ。」の言葉をかみしめ，常に子どもたちの明日を想い，変化を恐れず新しさにチャレンジしていく本園の先生方に心からのエールを贈りたいと思います。最後になりましたが，本研究を行うにあたりまして，様々な角度から温かいご指導，ご助言をくださいました平山許江先生にお礼を申し上げます。まだまだ，研究はなかばでありますが本園保育者一人ひとりが更に研究を継続してくれるものと信じております。有難うございました。

［園長　安達　勉］